

ステークホルダー委員会について

環境報告書は、学内外の様々な利害関係者（ステークホルダー）とのコミュニケーションツールです。そこで、社会貢献・コミュニケーションを促進する試みとして、広くステークホルダーの方々の声を集め、環境報告書や学内の取り組みにフィードバックすることを目的に、「京都大学環境報告書ステークホルダー委員会」を設置しました。公募及び依頼により集まって頂いた学内外委員22名により、3回の委員会を開催し、多角的な視点から、非常に有意義な意見や提言を得ることができました。また、学生の方々には、取材・執筆といった作業に関わって頂き、本報告書の作成を支えて下さいました。

**ステークホルダー委員会の開催概要**

◇第一回：2006年2月11日

委員の顔合わせと委員会の趣旨説明を行うと同時に、初回となる京都大学の環境報告書作成に向けた基本方針について議論を行いました。

地域・市民委員の方々などからは、地域と大学や学生が、環境報告書をきっかけに、コミュニケーションを図れば、互いに環境取り組みを進めやすい

という期待・意見が寄せられ、環境コミュニケーションや大学の透明化に向けたステークホルダー委員会の役割を改めて確認しました。

環境報告書の作成経験の豊富な企業委員の方からは、掲載内容に関する様々なアドバイスを頂きました。特に、取り組みを重ね、段階的に展開していくことを前提に、読み手を絞り、内容を精査することの必要性を提言頂きました。

また、学生委員の方々からは、他大学の環境報告書を踏まえた提言や、読み手の立場からの意見や希望、さらに、盛り込むべき内容に関するアイデアが出されました。



◇第二回：2006年4月24日

主に環境報告書ダイジェスト版の構成及び掲載内容について議論を行いました。

地域・市民委員の方々からは、環境へ意識が高い人だけで努力しても解決しないので、環境報告書を読んだ学生の意識が変わるような内容が望ましいと提言頂きました。

企業委員の方からは、構成や掲載するデータの項目等内容に関する様々なアドバイスを頂きました。特に、テレビCMのように、見てもらって面白いと興味を持ってもらうことが大切であり、活動に繋がる報告書にできるように検討する必要があると提言頂きました。

また、学生委員の方々からは、情報量が多いので内容を絞る、環境への取り組みの効果や実例を盛り込むべきといった提案を頂きました。

◇第三回：2006年6月15日

主に環境報告書詳細版について議論を行いました。

地域・市民委員の方々からは、詳細版については、地道な取り組みを生かし、正確さを重視したものを作成することが望ましく、ダイジェスト版にする際に、学生に何をやってほしいのかがわかるものにし、特にダイジェスト版はテーマを絞って掲載すべきと提言頂きました。

企業委員の方からは、ページ構成や掲載内容、詳細版の位置づけに関する様々なアドバイスを頂きました。特に、いろいろな角度から掲載しているので、興味のあるところから読んでもらえるように工夫が必要と提言頂きました。

また、学生委員の方々からは、文章の精査や見て頂きたい項目は強調することが必要、データの掲載項目等様々なアドバイスを頂きました。

◇第四回：2006年7月26日

ほぼ完成に近づいた詳細版・ダイジェスト版をご覧いただき、議論を行いました。



情報公開に積極的な姿勢に評価をいただく一方、構成員一人一人が何をすべきかが十分につたわってこないといった厳しいご意見や次年度への期待の言葉をいただきました。

最後に、ステークホルダー委員会から京都大学への提言をまとめて活動を終了しました。

### ステークホルダー委員会からの提言

本報告書について、京都大学環境報告書ステークホルダー委員会からご意見とアクション提案をいただきました。

京都大学は、今回、初めて「環境報告書」に取り組みました。ステークホルダー委員会委員長として、委員会の議論や委員の意見をもとに、本報告書や京都大学の環境取り組みについて、評価すべき点や今後の課題を、5つのポイントに絞り、提言としてまとめました。

#### 1. 環境マネジメントシステムを構築し、PDCA (Plan Do Check Action) サイクルを構築し、その運営体制を明確にすること

4年前(2002年)に制定された「京都大学環境憲章」では、環境マネジメントシステムの確立が謳われています。しかし、本報告書の組織図や取り組み報告においても、まだ体制は明確にされていません。PDCAサイクル及びその運営体制を明らかにしなければ、本報告書の作成作業を通じて得られた情報についても、点検・評価(Check)して、見直し(Action)して、次の計画(Plan)に結びつけることができません。今後の取り組みに期待したいと思います。

さらに、それを全学的に実行する(Do)には、各学部・研究科の理解と協力が不可欠です。その点において、本報告書の一連の教育・研究インタビューは、多くの研究科長に環境報告書の存在を認識していただく機会となり、今後の学内展開につなげる貴重な取り組みになったのではないかと評価します。

なお、環境教育体制の整備も、重要です。システムに組み込んで頂きたいと思えます。

#### 2. リスク/安全管理や法的要求事項の遵守については、常に確認を行い、確実にすること

アスベスト問題や化学物質等の管理については、ページを割いて丁寧に報告しておられ、リスク管理やその情報開示に対する真摯な姿勢が感じられます。しかし、このような問題については、問題発生・対処・事後管理の各段階において、常に検証し、またコミュニケーションを図ることが必要です。本報告書にとどまらず、確実にフォローアップして頂きたいと思えます。

#### 3. 信頼性あるパフォーマンスデータを安定的に収集、公開、検証すること

環境負荷パフォーマンスデータについては、初めての取り組みにも関わらず、相当量の情報を収集・整理し、詳細な数値まで公開されており、その努力を高く評価します。しかし、信頼性のあるパフォーマンスデータを継続して蓄積していくためには、今回の取り組みを見直し、安定的で信頼性の高い情報収集と検証の仕組みを考え、また、関係者のスキルアップを図っていくことが必要と考えられます。さらに、データの意味がわかるような配慮も忘れないで頂きたいと思えます。

#### 4. 構成員への本報告書の周知に努め、「できることから始める」ことを呼びかけていくこと

初の環境報告書として、学内構成員への周知を第一目標にあげ、ダイジェスト版を作成されました。環境報告書作成の意義は、印刷・公開して達成される訳ではなく、コミュニケーションツールとして機能させることにもあります。周知に努められることを期待します。また、このような機会に、取り組みやすいことから、地道にアクションを呼びかけていくことも重要です。そこで、学生委員の方のアイデアをベースに「できることから始めてみよう(ABCから



始めてみよう!」)と提案したいと思います。これが、京都大学らしい自主的  
でアイデアに溢れた行動の輪に結びついていくことを期待しています。

5. ステークホルダーとのコミュニケーションを継続し、環境問題における大学の  
使命を模索していくこと

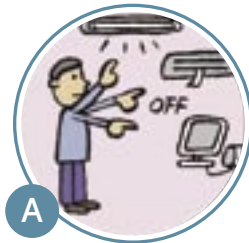
ステークホルダー委員会の設置は、社会に開かれた大学にしていく意気込み  
として、高く評価します。しかし、コミュニケーションの場とするには、まだ  
まだ改善の余地があると思います。また、継続していくことも重要です。今後  
も学内外のステークホルダーとの交流を大切にし、様々な議論を重ねながら、  
環境問題に対する京都大学のあり方を模索していき頂きたいと思ひます。

京都大学環境報告書ステークホルダー委員会からの提案です

みんなでやると効果がある! 全構成員でアクションをおこすために

プロジェクト  
アイデア  
募集中!

ABCから始めてみよう!



A

After Five

～省エネのための後始末5ヶ条～

- ①講義後の教室などの冷暖房をOFF!
  - ②誰もいない部屋や廊下の照明をOFF!
  - ③研究室を出るときは、パソコンをOFF!
  - ④待機電力の無駄をなくすために、  
主電源も確認!
  - ⑤電気ポットやプリンターも、要注意!
- 京都大学のエネルギー使用量は年間24億MJ。  
これは一般家庭のおよそ5万軒分!  
番外編:夏期冷房は28℃  
冬期暖房は20℃!



B

Bag, No thank you!

～省資源・ごみ削減～

レジ袋を始めとする容器・包装材は、  
処分される生活系ごみの象徴。  
削減に向けて、マイバックの持参を…  
そして「レジ袋いりません」のひとことをして!  
京都大学の生活系ごみ発生量は年間5000トン。  
これは一般家庭のおよそ5000軒分!



C

Campus Green

～キャンパス緑化&快適化計画～

虫のいるキャンパス  
木陰の多いキャンパスなど…  
アイデアをだしあって  
実現可能な提案に! ※提案アイデア募集中

- 京都大学の全構成員や地域市民の自主的な発案・参加・協力により、できることから、Act Locally in the Campus of Kyoto Universityを始めてみては? という京都大学環境報告書ステークホルダー委員会からの提案です。
- 今回は、例として、3つの行動をあげましたが、活動は、これらに限定されるものではありません。ふさわしいと思われるアイデアを随時募集していますので、応募下さい。なお、今回提示したABCは、キャンパスライフで感じる問題点や課題、取り組みやすさなどを鑑み、ステークホルダー学生委員の議論をもとに例示したものです。
- 啓発に参加・協力していただける方は、ポスターの掲示をお願いします。(HPからもダウンロードできます)

ABC運動ポスター等の取り寄せや、提案アイデア等の募集については、ステークホルダー委員会事務局(メール:abc@eprc.kyoto-u.ac.jp  
ファックス:075-753-7710)までお願いします。京都大学環境報告書ステークホルダー委員会への参加者も募集する予定です。

京都大学環境報告書ステークホルダー委員会について

◆設立 2006年2月

◆構成

- ・委員長: 高月 紘 (石川県立大学教授、京都大学環境保全センター名誉教授)
- ・メンバー (五十音順): 浅利美鈴 (京都大学環境保全センター 助手)、稲垣達也 (京都大学工学部 4回生)、井上 哲也 (宝酒造(株) 環境広報部 環境課)、今西恒子 (聖護院学区ごみ減量推進会議)、遠藤峻 (京都大学大学院地球環境学舎 修士2回生)、大高幸一郎 (京都大学環境安全保健機構長)、押川由希 (京都大学大学院地球環境学舎 修士2回生)、春日あゆか (京都大学大学院地球環境学舎 修士1回生)、北村昌文 (京都市環境局地球環境政策部環境管理課長)、佐藤明子 (京都大学大学院文学研究科 修士1回生)、平信行 (京大生協 専務理事)、竹井さゆり (京都大学法学部 4回生)、竹川敦子 (京都大学大学院教育学研究科 修士2回生)、中山三郎 (大阪観光大学観光学研究所客員研究員、京大生協生態学センター協力研究員)、原強 (コンシューマーズ京都 理事長)、福井和樹 (京都大学大学院工学研究科 修士2回生)、藤原彬 (京都大学施設・環境部環境安全課長)、細木京子 (日本環境保護国際交流会: J.E.E)、堀籠聡 (オムロン(株) 経営総務室 品質環境部)、丸山郁夫 (株高島屋 総務部 環境・社会貢献担当)、鷺野暁子 (京都大学大学院地球環境学舎 博士1回生)



### ステークホルダー委員会からの提言をうけて

いくつかの重要なご指摘をいただき有難うございました。その中で、まず京都大学環境憲章を具体化するため、京都大学にふさわしい環境安全衛生マネジメントシステムの確立が急務であると考えています。この秋から取り組みます。この報告書は法律に基づいて作成、公表しましたが、大学の教育・研究・医療による環境負荷のデータを作成することが目的ではありません。真に実りあるものにするには、大学の構成員ひとりひとりが真剣に環境安全について考え、できることから実行していただくことが最も重要です。報告書作成の意図を周知し、まず身近なところの整理・整頓ならびに紙・ゴミ・電気の使用量の削減を訴えていきます。

環境報告書ワーキンググループ代表 大畠 幸一郎

### インタビューや取材に協力いただいた方々より

環境報告書の作成が、地域の方や企業の方、そして学生などを巻き込んで行われたことは非常に高く評価できることだと思います。しかし、環境報告書を作成する「ワーキンググループ」と「ステークホルダー委員会」の連繋が不足していたようにも感じました。今後は、今回のように「ステークホルダー」を巻き込むことはもちろん、それがより効果的に活用されることを願います。(稲垣達也 工4)

京大初めての環境報告書。個人的な反省は、「なぜ環境報告書を作るのか？」に対する明確な答えを見つけだせなかった事だと思います。確かに、法的な義務が環境報告書をつくる理由ですが、これから毎年発行していく中で、京大独自の「理由」を見つけ出す必要があると感じました。今後は、世間一般に言われている「環境問題」だけではなく、京大の構成員にとって、どんな「環境問題」が存在するかを発見し、報告していくことが、環境報告書の作成により意味を持たせ、環境の改善につながるのかもしれない。(遠藤峻 地球環境M2)

記念すべき、環境報告書初刊作成の開始直後からの長期間、会議や執筆に関わり、今まで知らなかった京都大学の様々な面を知ることができました。中でも、異なる専門領域の先生方や、学年やバックグラウンドの異なる学生の方々との出会い、執筆のための情報収集で、京都大学の環境に関する一つ一つの取り組みについて深く知ったことが大きな収穫です。じっくりと向き合うことで、京都大学のことをさらに好きになりました。ただ、関わっていくなかで、データの収集がかなり大変そうに感じたことが印象的でした。京都大学は、環境への取り組みのスタートを切ったばかりですが、その前段階のところまで力尽きてしまわないように、「楽に」「楽しく」環境負荷削減を目指せる仕組みが整うといいなと感じました。(押川由希 地球環境M2)

忙しかったこともあり、あまりステークホルダー委員として活動できなかったのですが、京都大学の環境報告書を作る過程を少しでもかま見られたことをうれしく思います。一冊の環境報告書を作るのに、少しでも多くの人によんでもらえるようにと、様々な配慮がされていることを実感しました。環境報告書が京都大学の研究施設としての側面を強く押し出したものになったことが個人的には良かったと思います。(春日あゆか 地球環境M1)

文学研究と「環境」との接点とは何か。私自身しばらく思い迷う日々が続きましたが、伊藤邦武文学研究科長への取材を通して、一定の解答が得られたように思います。今後、文学部・研究科にできることは様々あれど、まずは反故の再利用に磨きをかけることが火急の用かもしれません・・・この環境報告書が、手に取ってくださった方それぞれの「気づき」の場となることを祈っております。(佐藤明子 文M1)

報告書作成に微力ながらも携わることができ、大変嬉しく思っています。学生のみで作成する京大生協の環境報告書作りとはまた別の”大変さ・面白さ”を感じ



じることができました。「継続は力なり」の言葉どおり、報告を重ねるごとに数値が改善されていくことを強く願います。また、報告書自体についても、計画の大幅な変更・修正が多くあった初年度の反省を生かし、よりよいものに改善されていくことを期待します。(竹井さゆり 法4)

報告書の制作活動はまったく手探りで始まりましたが、意欲的で行動力に富んだステークホルダー委員の方々の活躍によって、全学の環境に関する教育・研究の現状と今後の取り組みについて基本的な情報を得ることができました。今後は個々の具体的な取り組みの紹介や、新たな環境関連の教育・研究の誕生が年次報告されていくでしょう。また、大学の教育・研究活動に伴う環境負荷の低減に関しては、PDCAサイクルのマネジメントに関する責任主体-当面のそのシステム-が、できるだけ早く構築されることを期待します。(竹川敦子 教育M2)

環境報告書の作成を通じて、様々な分野の研究科長にお話を伺う機会を得ることができました。そこで感じたことは、環境問題は実に多くの側面があり、それ故誰もが解決に向け貢献できる場があるということでした。このことが少しでもお伝えできる内容であれば嬉しく思います。他方で、今回は大学の環境負荷の現状を把握するに留まったため、今後は負荷低減に関する明確な数値的目標を掲げ、評価・改善に繋げるといった良い循環が、本報告書によって促進されることを望んでいます。(福井和樹 IGM2)

京都大学初の環境報告書の作成過程に参加し、大学の環境情報や学外委員の忌憚のない意見に触れたことは貴重な経験でした。ただ、第三者評価の観点に立つと、報告書の執筆者とステークホルダー委員とは分ける必要があると考えます。またステークホルダー委員会では、事務局の説明と委員からの発言に終始しており、委員会が議論や対話の場として機能したのかという課題が残っています。今後は本報告書が大学における環境取り組みの一貫として、学内外の情報・問題意識の共有に役立つことを願います。(鷲野 暁子 地球環境D1)

京都大学環境報告書ワーキンググループについて

設置：2005年8月

代表：大馬幸一郎 環境安全保健機構長

委員 (50音順)：浅利美鈴 (環境保全センター助手)、井崎宏子 (生協)、板橋佳代 (工学研究科職員)、川村孝 (保健管理センター所長)、酒井伸一 (環境保全センター教授)、中植由里子 (総務部広報課職員)、中尾聡 (施設・環境部職員)、中川浩行 (環境保全センター助教授)、西村康久 (施設・環境部職員)、平井康宏 (環境保全センター助教授)、藤原彬 (施設・環境部環境安全課長)、本田由治 (環境保全センター職員)、吉川正紀 (施設・環境部職員)、松浦幸弘 (宇治キャンパス職員)

事務：施設・環境部環境安全課

2004年に制定された環境配慮促進法により、本学も環境報告書を作成・公表することになりました。作成の中心的役割を担ったのが、環境・安全・衛生委員会のもと、本学教職員を中心に構成された京都大学環境報告書ワーキンググループです。2005年8月から2006年7月にかけて計10回の会議を開催し、報告書の基本方針から具体的構成に至るまで議論を重ねました。その結果として、ここによくやくひとつの形をお届けすることができました。大学内外のコミュニケーションツールとなることを目指した本報告書に対して、添付のアンケートにより皆様の忌憚のないご意見をお聞かせ願えれば幸いです。



理事賞



古紙配合率100%再生紙を使用しています

発行：国立大学法人 京都大学

編集：京都大学環境・安全・衛生委員会

京都大学環境報告書ワーキンググループ

(代表 大馬幸一郎環境安全保健機構長)

発行日：2006年9月

問い合わせ先：〒606-8501京都市左京区吉田本町

京都大学施設・環境部環境安全課環境計画グループ

電話：075-753-2383 ファックス：075-753-2355

メール：eco2006@mail.adm.kyoto-u.ac.jp